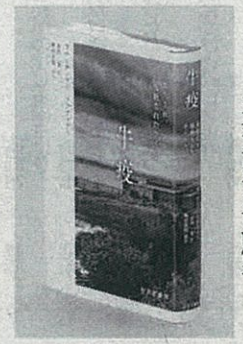
読書

牛疫

アマンダ・ケイ・マクヴェティ著
山内　一也訳



みすず書房　4400円

ウイルス根絶への闘い

牛疫は、天然痘に次いで人類が根絶に成功したウイルス感染症である。感染力が強く、感染したウシの大半を殺す強い毒性のために、世界各地で食料供給に大きな影響を与えた。ドイツ語でウシのペストを意味する「リンダーペスト」と呼ばれるなど、長く人類を苦しめた牛疫の根絶に至るまでの闘いを本書は描く。

物語は、カナダ東部ケベック市の北東約50キロ、セントローレンス川にある長さ2キロほどの島から始まる。各国の思惑に翻弄されながら展開した牛疫研究で、主要な舞台となった施設があった場所だ。副題に「兵器化され、根絶されたウイルス」とある通り、第2次大戦下の日米両国などで進んだ牛疫ワクチンの開発過程では、根絶の可能性と同時に、生物兵器にもなることが注目された。

敵国に食料生産の決定的ダメージを与える、神のごとき力を手にする可能性を考えた者もいたようだ。その危うさには「魔法使いの弟子」の寓話を想起した。魔法使いの弟子は、魔法の掛け方は習い知っていても、その解き方を知らない。自らが掛けた魔法で、最終的に収拾がつかない混乱をもたらすのだ。

国際的な連帯か、分断された中での自国中心主義か。現在の新型コロナウイルス感染症対策と重なる側面もある。牛疫は幸い、前者が勝り、終息に向かった。新型コロナはワクチン開発で国際協力が進んでいるが、その先のワクチンの分配はどうなるであろうか。

麻疹ウイルスは、牛疫ウイルスがヒトに感染した結果生まれたとされる。歴史は浅く、始まりは千年前とも2500年前ともいわれる。その後、世界の隅々へ広がり、ワクチンで予防可能にもかかわらず、コンゴ（旧ザイール）などアフリカの国々では今も多くの命が失われる。人類はまだ牛疫と縁を切れていない。

本書が示す科学技術の意義や科学と政治の在り方は、新型コロナへの対処で今まさに問われていることでもある。訳もいい。

（山本太郎・長崎大熱帯医学研究所教授）

神々は真っ先に逃げ帰った　棄民棄兵とシベリア抑留

アンドリュー・バーシェイ著
富田　武訳

人文書院　4180円

総括できない国の急所

呪詛のようなタイトルだ。敗戦直後、植民地や占領地の民よりも、分霊された神社の鏡を優先して内地に空輸した国のあり方を、つまり国が最終的に守ろうとしたのは、民ではなく、国体、神、将校だったという事実を示す。戦後75年経てもまだこの事実を総括できていないこの国の急所を、本書は照らしている。

1945年8月9日、ソ連は満州国に侵攻した。関東軍司令部は真っ先に逃げた。赤軍の猛攻の中で、残された人たちは、集団自決を選んだり、飢餓で倒れたりした。兵士たちは捕虜となり、シベリアの収容所へ送られる。

「シベリア抑留」に関心ある人ならば知っている経験者の3人、すなわち画家の香月泰男、改造社の編集者だった高杉一郎、そして詩人の石原吉郎が本書の主人公である。

痩せた仲間の遺体を直視できず「遺体が全部かくれたとおもわれるころ、ようやく向き直って埋めるのだった」と言う香月。満足に埋葬もできない「収容所群島」に慄く。

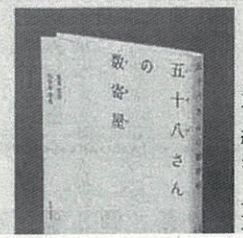
この香月の展覧会で、香月の解説が加えられた絵を見た石原吉郎の批判は頗る重い。「抑えつけた絵の具の層の下に、望郷の願いそのものような緑とばら色のイメージをありありと看取できた」「失語の時点で化石化した表情に、なんの文字を加えることがあろう」。「最もよき私自身も帰ってはこなかった」という自己規定の中で、詩だけに心を開こうとし最後は酒に溺れるように死んだ石原の孤独の深さを推し量ることができる。

「最も苛酷な、非人間的な環境に置かれることによって、実質的には最もきびしい戦争責任を担わされた」ところに巣鴨の戦犯とシベリアの囚人の違いを置いた石原は、8年間の抑留後に日本でさらなる地獄を見る。香月が描いた目が空洞の囚人よりさらに乾いた内面空間が、責任を負わなかった指導者層が賑やかに推し進めた経済成長に押しつぶされていくことが、日本戦後史なのだとあらためて思わされる。

（藤原辰史・京都大准教授）

五十八さんの数寄屋

藤森　照信、田野倉徹也著



鹿島出版会　3740円

「五十八さん」と数寄屋の巨匠、吉田のことで、「数寄屋」簡単にいってしまえば湯の考え方を取り入築である。

日本の近代建築はど短期間で西洋にき、その高い評価は築史として書き著さた。しかし、そこにはない。建築家、堀に、20世紀の世界の大きな影響を与えたわれたが、少々面倒ろもあり、その叙述省かれている。

本書の著者は、立うが、現代には珍し屋に飛び込んだ建築る。藤森は建築史家るが、田野倉がいに、彼の記す近代建らはすっぽり数寄屋ていた。それが近代のスタンダードだろう。だが彼は、吉寄屋に近代性を発見身は建築家として数も取り組んだ。一方

ブックマイスター　SF

「アンドロメダ病原体―変異―」など

人間の無知・欲望との戦い

新型コロナウイルス感染症下の新たな日常を模索する中、私たちが思い出したのは、まずカミュの「ペスト」であり、パンデミックSFの小松左京「復活の日」やマイクル・クライトン「アンドロメダ病原体」だった。その続編としてクライトンの遺族公認で書かれたのがダニエル・H・ウィルソン著、酒井昭伸訳「アンドロメダ病原体―変異―」（早川書房・上下各1980円）である。

正体不明の病原体「アンドロメダ因子」が米国の街を全滅させた前作から50年後。病原体の再発現を警戒する米国は世界規模での監視システムを構築していたが、観測ドローンが赤道直下のアマゾン奥地で不思議な巨大構造物を発見する。その地域ではアンドロメダ因子の変異種による感染症も発生していた。

劣悪な環境下、致死率の高い感染症と戦うのは極めて困難だが、さらに巨大構造物（「特異体」）の予測不能の動きが恐怖を増殖させる。感染症発現には人為的介入が疑われ、さらなる変異の危険性も。事件は宇宙にまでつながる壮大なスペクタクルへと発展していく。

感染症との戦いは単に医療だけの問題ではなく、先端技術の新たな応用開発や政治的闘争、さらには人間の無知や欲望との戦いでもある。なお本作は単独でも楽しめるが、前作を先に読むといろいろな工夫や登場人物の背景などが見えやすくなる。

もう一冊のN・K・ジェミシン著、小野田和子訳「第五の季節」（創元SF文庫・1650円）も、世界滅亡の危機をはらんだ物語だが、こちらの世界を襲うのは、数百年の周期でやってくる急激な地殻変動だ。世界全域に及ぶ大変地異とそれに続く環境激変により人類文明は崩壊し、災害以前の歴史は伝説や神話としてしか残されない。

中空を飛ぶ旧文明の遺物や「石喰い」と呼ばれる人類とは異なる種族など、奥深い謎に満ちた世界だが、物語の中心にいるのは、思念によって大地と結びつき、物理的な変化を起こす力を持つ超能力者の存在。彼らの力は両義的で、地殻変動を鎮めるのに役立つが、暴走すればかえって世界の破滅の引き金になりかねず、畏怖と差別の対象だ。

象徴に満ちた魅力的な物語は、私たちの社会にも存在する理不尽な支配構造や偏見や混迷を見据えている。

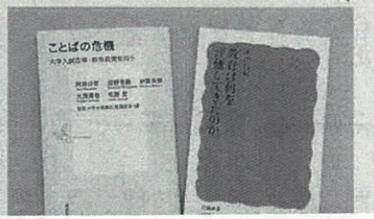
（長山靖生・評論家）

読んでナルホド

言葉は単なる道具か。

実学重視の中でなおざりにされた言葉をめぐる課題と、文学的知性の重要性を5人の研究者が語る、東京大学文学部広報委員会編「ことばの危機」（集英社新書・924円）。

「現代文」を「論理国語」と「文学国語」の2科目に分けた高校の学習指導要領改定や、実用的な文章（条文や契約書など）の読解が多用されるであろう大学入学共通テスト。これらの教育改革の背景にあるのは、言葉を単なる道具として捉え、目的達成のための理解力や読解力を育てようとする発想だと指摘する。

資料として示された、大学入試センター公表の「記述式問題のモデル問題例」は、論理国語が扱う実用的な文章の読解問題だ。書が指摘するように、出題しいという前提で読み、理るかを試すものになっていうした試験に向けた学習が国語と言えるのだろうか。は論理国語を履修する学校ると予想されている。

論理国語と文学国語の分近年盛んな読解力の低下を